

李登輝氏 二つの政治的決断



拓殖大学学事顧問

渡辺 利夫

れ、犠牲者は今なお不明ながらも、2万人を超えるといわれる。李登輝氏は逮捕を恐れて退選を余儀なくされた。

二・二八事件の後、1987年まで実に38年にわたり戒厳令が敷かれ、事件は闇に葬られてきた。しかし、戒厳令下にありながらも、台湾の経済は発展をつけ中産階級が形成され彼らの権利意識が高まりをみせた。蔣介石にかわって実権を握った蒋經国はこの現実をみて翻身を密かに決意。『中国国民党』は『台湾国民党』へと変じようとしていた。蔣經国は死後、李登輝氏が総統、国民党主席へとつめ替り、そして台湾の民主化の幕が切って落とされた。

李氏は1995年2月28日、台北新公園で執り行われた「二・二八事件記念碑落成式」に臨み、犠牲者に対する公式の謝罪を表明した。二十数年前のその式典の光明

正論

景を、私は鮮やかに思い浮かべる
ことができる。省籍矛盾解消の画
期であり、台湾を新たな社会統合
へと向かわせる転機となつた。
「二国論」に込められた意思
もう一つ、鮮明に記憶している
事実がある。1999年7月9
日、ドイツの公共放送の取材に応
えて李氏が「二国論」を表明した
ことである。李氏はそこについて述
べた。
「两岸関係の位置づけは国家と
國家、少なくとも特殊な国と国の
間のものだ」と述べた。

湾住民が自らの手によって決定するようとする決意の表明である。そしてこのことは、国民党が台湾政黨でありつづけるには、国民党の変身、つまりは国民党の「大陸中国に抗し、台湾の生存をいかに国を進めるわけにはいかない。登輝生涯の政治的決断が「二國論」に鮮明に浮かびあがる。まつとうるか。虚構のうえに浮かびあがる。李氏は司馬遼太郎との対談「所の苦しみ」台湾人に生まれた哀れ（『週刊朝日』1994年6月6・13日合併号）の中で次の通り語っていた。

（いままでの台湾の権力を握ってきたのは、全部外來政權でござった。最近私は平気でこういつづけた。

李建場にあか台中執事は、自らの設定した2000年直選舉への出馬を辞退した。この選舉で新たに總統に選出されたのは民進党的陳水扁だった。国民党の連戦氏は敗退した。国民党の連戦氏は敗退した。

拳に出た。中華民国が大陸を含む中国全体の正統政権だという「虚構」をこの修正によって崩したのである。台湾という一つの政治実体を率直に認め、最高権力者を台

を言います。国民党にしても外来政権だよ。台湾人を治めにやつてきただけの党だった。これを台湾人の国民党にしなければいけない。かつてわれわれ七十年代の人

オピニオン